

タイトル：MEIS2/MEIS 機関研究員／非常勤研究員発表会

日時：2011年4月28日（木） 13:30-18:00

場所：AA 研 マルチメディアセミナー室（306）

大川 真由子（AA 研 研究機関研究員）

「オマーン帝国をめぐる歴史認識と国史形成」

<発表要旨>

報告者が研究対象とするオマーンは、17世紀に東アフリカへ政治・軍事的進出を開始し、19世紀初頭には一大海洋帝国となった。本発表では、オマーンの東アフリカ統治をめぐる歴史を、現オマーン政府および当事者であったアフリカ系オマーン人（本国の領土拡大を契機に東アフリカに移住し、1970年以降本国に帰還した人々）がいかに認識し、国史を形成しているのかについて、国定社会科教科書と指導教本、政府刊行の歴史書、およびアフリカ系オマーン人による著作の分析から明らかにした。

帝国史のなかでも報告者が注目したのは「語られない」歴史である。社会科教科書ではオマーン帝国時代を過去の栄光としてアピールし、東アフリカへのアラブ・イスラーム文明普及の担い手としての役割を強調することで、オマーン統治を正当化する記述が目立つ。にもかかわらず、東アフリカに対して「植民地」という用語は使用されず、オマーン史のなかに「植民地主義」は不在である。こうした姿勢は教科書のみならず政府刊行の歴史書やアフリカ系オマーン人の言説にも共通する。オマーンにおいてみずからのアフリカ統治は、抑圧／被抑圧という図式では理解されておらず、こうした帝国意識が画一的な歴史教育のなかで醸成・再生産されている。

これに加えて、アフリカ系オマーン人の著作に限定してみられるのは、19世紀末以降オマーンに代わって東アフリカを統治したイギリスに対する批判的姿勢である。彼らはイギリスに対して「植民地主義（国家）」という用語を用い、その民族的分割統治や強制的言語政策を痛烈に批判する一方で、オマーン統治時代における現地民との友好関係やゆるやかな統治を指摘することで両者を対置させている。

こうしたアフリカ系オマーン人による歴史書の出版は1990年代以降さかんになっている。これは西洋によって作られた「アフリカを搾取したアラブ奴隷商人」というイメージを払拭するのと同時に、国内においても、アフリカ帰りを理由に社会的差別を受けている彼らが、海洋帝国の担い手としてオマーン社会において「正しく」位置づけられるための活動であることを報告者は指摘した。